キルプの軍団

大江健三郎

岩波書店

キルプの軍団

一九八八年九月二二日　第一刷発行©
一九八八年一一月七日　第二刷発行

定価一八〇〇円

著者　大江健三郎

発行者　緑川亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
発行所　株式会社　岩波書店
電話 〔三〕二六五-四一一一
振替 東京 六-二六二四〇

印刷・凸版印刷　製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-000415-8

1

まずキルプという名前が、気にいったのでした。Quilpとアルファベットで印刷した様子は、ネズミに似ていると思います。これが自分の名前だったらことだぜ、そう考えたと、最初の個人授業の後で忠叔父さんにいいました。――そうかい？ ディケンズは、悪役には悪役らしい名前をつけるものやから、という返事だったのですが、現役の暴力犯係長の叔父さんが妙に寂しそうだったので、僕は説明しました。

――いままで読んだところだけでも、僕はキルプが気にいっているんです。挿絵だけ覗いて見た分では、後の方のキルプが気の毒なくらいに思っています。

――気にいった？ キルプがね…… それはどういうことなんやろ。しかし良かったよ、これからしばらくキルプとつきあうわけやから。わしはオーちゃんならばキットが気にいると思ったがな。

実際、ペンギン・クラシックス版のテキストを渡してくれた時――それは母が叔父さんにお金を渡して、新宿の紀伊國屋で叔父さんの分と僕の分と、一冊ずつ買って来てもらったわけでしたが――、次の週から始める講読のために、ある程度ザッと読んでから、赤線を引いて囲んであるところを中心に、辞書を引いて下調べするようにと叔父さんはいいました。そして実際、赤い括弧で囲まれたところのひと

つは、キットの描写だったのでした。叔父さんは、僕がそこを気にいるはずだと、楽しい気持で赤線を引いてくれたのだろうと思います。

"Kit was a shock-headed shambling awkward lad with an uncommonly wide mouth, very red cheeks, a turned-up nose, and certainly the most comical expression of face I ever saw. ... I entertained a grateful feeling towards the boy from that minute, for I felt that he was the comedy of the child's life."

さて、長い外国語の引用に出くわすと、面くらわれるかもしれませんから、忠叔父さんの授業の後、ノートに書きつけておいた僕の訳文をそえることにします。一応、御参考までに！

《キットは、モジャモジャ頭の、ひょろひょろ歩く不恰好な若者で、並たいていじゃなく大きな口をしていました。とても赤い頬、上に向いている鼻、そしてかつて見たなかで確実にいちばん滑稽な表情をしているのでした。……その瞬間から、私はこの少年に良い気持をいだいたのです。というのも、私はかれのことを、子供の暮しのコメディ版と感じとったからでした。》

僕もここに、愉快なやつが出てきたのは認めるけれど、しかし。同年輩の相手のことですから、一応かれは十九世紀のイギリス人だけれども、the comedy of the child's life を自分に引きつけるようだったら、それこそ僕は comedy じゃないでしょうか？　キットは、崇拝しているといっていいほど好きなネルと、そのお祖父さんだけだと思って、いつものとおり元気に跳びこんだ骨董屋の店のなかに、見

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

知らぬ紳士がいたので――この人がキットのことを the comedy of the child's life といっているわけです――、まあ、そういうふうに観察されていることもあり、the most extraordinary leer I ever beheld をしたのでしょう。じつは僕も母から、もの凄い横目で見るといわれているのですが……

やはり最初の授業のあった日、父もどういうわけかこういうことをいいました。――そうかい、オーはキルプが気にいったかね!? おれの考えでは、誰でもネルには抵抗できないからね、それはつまりキットと同様で、やはりキットに感情移入すると思ったがね…… それじゃキルプの、河端の事務所で使われている少年とは反対だね。キットと猛烈に喧嘩するやつ。いつも逆立ちしていて、そのおかげで、のちにサーカスの人気者になったという……、イタリア人の名前に改めて。

――トム・スコット、と叔父さんはよくしゃべる父に簡単な答えをしました。

父と忠叔父さんは、その夜かなり遅くふたりで酒を飲んでいたのでした。父が飲んだ酒にかきたてられるようにしてまた飲むというふうに、いつまでも飲みつづけるのに対して、忠叔父さんは一杯か二杯グッと飲むと、もう飲みません。そういうわけで、手持ぶさたな具合の叔父さんの脇に坐り、もっと手持ぶさたな具合で、部屋に引きさがる潮時を待っていた僕に、叔父さんはこういいました。

――その本のね、最後の章をざっと見て、Tom Scott という名前を見つけてやね、そこをちょっと読むと、続きのなかに、an Italian image lad という文句があるはずなのやがな、そこに註がついていないかどうか見てよ、オーちゃん。註があるならば、むしろその小さな数字があるところを見ていく方

が早いかね？

――ありました。

――この本では、どう説明してある？　わしにはずっとそこがあいまいでね。K兄さんが、イタリア人の名前にかえて、といったところ。それはそのとおりでいいのやと思うがな。どこからそのイタリア名が出たか、やね。

――ヴィクトリア朝に、陶磁器で作った有名な人の肖像の、石膏の模像を、イタリア人が売って歩いていた、と説明してあります。括弧して、その肖像がimageなんだとも書いてありますけど……

――そうだね、もともとそういう売り子が、イギリス人だけれどもイタリア名で、ということもありうるな。

――忠叔父さんは学者のようね、と少し離れてアイロンがけしていた母がいいました。暴力犯係刑事というよりも……

叔父さんは頭をかたむけて――父とよく似た大頭ですが、それを支えている頸の、それこそextraordinaryな逞しさで、肩からずっとまっすぐつながった、肉体労働者の頭、というふうに見える――、その頭の動きにあわせて眼をパチクリさせました。暴力犯というのは叔父さんが取り締まる対象で、叔父さん自身にこの形容句がかかってくるのじゃないわけです。僕は母のいったことを軽率に感じて、二階に上って行きながら、ついドアをバタンとしめてしまったのでした。

2

忠叔父さんは、四国の松山から仕事で出張してきました。父と叔父さんは、その松山から交通渋滞なしでも三時間かかる山道を入った森のなかで、生まれ育ったのです。ずっと以前、祖母を見舞いに一家で森のなかへ帰ったことがあります。村があまり山奥だったので、僕ら子供はなんだか圧倒されてしまい、小学校の一年生だった姉は――それでも直接父に尋ねることは遠慮して――、幼稚園児だった僕に、パパが子供だった頃、マンモス、居たかねえ？　といいました。

忠叔父さんは、頸の太さのことはもういいましたが、高校ですでに柔道二段だった大男で、リーゼント・スタイルかと思ったくらいに髪をしっかりかため、角ばった肩を振って歩き、いつでも背をまっすぐにして腰かけています。顔の皮膚は芯まで浅黒い。つまりテニスで陽灼けしたというようなのとはちがった、ずっと戸外で働いている労働者の、年季をいれた浅黒さです。それもゴワゴワした鞣し皮、つまり鞣し方に失敗した皮の感じで、表情がよくわからないのです。しかも、たいてい生真面目に黙っています。だからといって気むずかしいのではない。一方、苛立ちやすいのに、人の気持は考えないで冗談をいう父と、兄弟でもずいぶん性格がちがいます。忠叔父さんの眼は切れ長で、母は仏像の眼のようだといいますが、僕は子供の時分、じっと黙っている忠叔父さんを見て、恐龍の眼に似ていると思って

いました。

上京している間、叔父さんが、僕の部屋に寝泊りするので、僕は父の書庫の端の、物置に使われている部分と書棚の背の中間に、マットレスを敷いて眠ることになりました。それ自体はかまわないのですが、僕の部屋には自分用の小型テレヴィに接続したヴィデオが置いてあるわけです。真夜中すぎにアメリカのニュー・ミュージックをまとめた放映があるので、録画する必要が一応はあります。しかしその時分には、僕のベッドいっぱいに躰のすみずみを行きわたらせるようにして寝ている叔父さんの脇で、音声はしぼってあるにしても、ヴィデオを操作することはできるものじゃない。テープ自体の音がありますから……　叔父さんが仕事に出ている昼間も、本来は自分の部屋だからといって、ものを取りに出入りするのは、はばかられる。暴力犯係刑事の個室に侵入する、という気がします。

それでもある日、古いオリエンテーリングの地図が必要で、取りに入りました。父は僕が昔使ったものについて、古いなになにをというと、――それは正確じゃないぜ、きみはまだ全体に新しいよ、というのですが……　警察手帳ではないはずだと思いますが、黒い手帳がベッドの脇の電気スタンドを置く台に載せてあって、戦時中が時代背景の連続テレヴィ劇に出てくるような、着物を着た若い女の人が貧相な花束を持って立っている、茶色の写真がハミ出していました。

――こういうものをひとの目にふれるところに放置されては困る！　ここはおれの部屋なんだからな、本来は！　と僕は周りの机や本棚やらを――なにものかがそこにひそんで見張っているかのように――

叱りつけるようにいって、それから写真を手にとって眺め、指紋をぬぐいとって、もとに戻したのです。

3

忠叔父さんが僕の部屋に寝泊りするようになって、はじめての土曜日、僕はオリエンテーリングの大会で三多摩地方へ出かけました。日が暮れて帰って来て、まったく泥だらけの躰を洗い、食事をしてから、書庫のマットレスに寝そべって、この日の競技用の地図を、都内・都周辺の、市販の地図と照合していました。そのうち僕はバッと上躰を起して、――おい、おい！　これはタマッタモノではない！　と大声でいったのです。そのまま階段を踏みならして食堂に降りて行くと、一挙にしゃべりたてたのでした。あっけにとられた具合に聞いている父と忠叔父さんとは、三角形のもうひとつの頂点が欠けているふうにテーブルに掛けて、ウイスキーを飲んでいたわけです。母が台所からハムやソーセージを切ったのを皿にのせて運んで来て、その第三の頂点におさまるところでした。

――僕は今日、多摩の競技会のコースで、木が茂っている斜面を横切って、近道しようとしたんですよ。正直にいうと予定よりタイムが遅れていましたし……　（なんとなく自然に敬語を使う具合でしたから、忠叔父さんに向けて話をしている、という気持はあったのでしたが、そこへ母が口を出して、オーちゃんは、毎週一度は競技会に出るというほど、オリエンテーリングにいれあげています、赤いピラ

ピラの布のユニホームが気に入っている様子ですよ、と説明したので、ますます忠叔父さんに向けて話すかたちになったのです。）道に迷った具合で、あせっていたんですが、石垣が妙にしっかり積んであって、その上の金網との間にすきまがないし、金網自体ずいぶん高くて、遠目には乗り越えやすそうだったのが、そういうわけにゆかないんですね。どこかに穴を見つけて潜り込もうとして、さんざんウロツイたんですけど、思いがけず管理がよくて……　結局ムダな努力だったわけで、大惨敗でした。

――オーは反射的に敏捷なところはあるけれど、スポーツマン・タイプじゃないからね、躰に異常が生じかけていたこともあるし、……あれは忠が見つけてくれたんだな。つまりたいてい良くないタイムらしいよ、と父が介入して来たのは、僕の話がこれだけのものだとして、つまりなんともアンチ・クライマックスの話を、とりつくろってくれようとしたのでしょう。

しかし、僕としては話の続きがあったわけです。

――がっかりして、もうまったくぐったりして、頑丈な金網を怨みながら帰ったんですけど、いま地図を調べてみたら、僕が潜り込もうとしていたのは、多摩動物公園の裏側斜面でした。

父が笑い、つづいて叔父さんが笑いました。さらに一拍おいてから母も笑いました。なにか問いかけられて答える時、僕はいつも一拍おく、とよく父にいわれますが、考えてみるとそれは母の性格が――あわせて叔父さんの、とはいわないにしても――、伝わっているのでしょう。母としては、そうでなくても赤いピラピラのユニホームで目立つ息子が、苦心して金網の穴から入り込んで、ライオンに喰い殺

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

される様子をリアリズムで想像して、それから気をとりなおして笑ったのでしょうが……

——動物公園の経営が逼迫してくるとしてさ、エサの費用を安くあげようとするならば、公園側で、高校生のオリエンテーリング選手が入り込めるほどの穴を、いくつか開ければいいわけだね。

父の軽口に、忠叔父さんはとりあわないで頭をかたむけ、それこそ二拍も三拍も置いて考えると、真面目にこういいました。

——ライオン放飼いの地域を避けて、斜面から上の道へ出るコースを検討しなければならないわけやね。そういう地理的な工夫を一瞬の間にやりとげて、うまく逃げるやつはおるものなあ。こちらはただ地道に追いかけるだけやけれども……

——オーちゃんは、ライオンからも警察官からも、追いかけられる危険をおかさないでもらいたいわ、と母はいいましたが、僕は忠叔父さんにあらためて親しみを感じたのでした。

4

僕の躰に異常が生じかけていた、と父がいったのはこういうことです。三、四年前の夏、つまり僕ほどの年齢の者には大昔ですが、拳銃強盗の犯人を護送する仕事で上京して、一泊した叔父さんが、一応シャツは着ていた僕の躰を見て、気がついてくれたのでした。それも僕をジロジロ見たというのじゃな

く、頭を斜めにして一瞬見ただけで、

――わしはオーちゃんが、胸のあたり側彎症じゃないかと思うがなあ、と母にいいのこして帰ったのでした。家族の前で裸になることがなくなっていた僕の肋骨の異常は、続いて学校の身体検査で発見されました。とくに外科的な処置の必要はない、ということでしたが……

母の話では、僕は赤んぼうの時、二歳ちがいの姉がいたのと、年はもっと離れているのですが、障害があってやはりベビー・ベッドに寝ている兄がいたこともあって、たいていの来客は僕がいることに気がつかなかった、それほどおとなしい子供だったようです。学校にあがる前は、ひとりで「レゴ」をやっていました。自分の頭より大きい飛行機を組み立てている僕をとった写真がありますが、そこに映っているのは、われながら不思議なほど、カメラで狙っている父か母かのことを気にかけていない子供です。同じアルバムの姉の方は、ちゃんとVサインをしたりしているのですが。つまり僕は、自閉症に近い子供だったのだと思います。

私立の小学校に入ってからも、おなじ学校の友達が近くに居ないこともあって、家の外で遊ぶというようなことはありませんでした。そうした活動的でない生活の効果が積りつもって、気がついた時には側彎症になっていたのでした。それから僕は自分の肉体を改造することを思い立って、運動をやることにしました。その過程で、オリエンテーリングに熱中するようにもなったのです。中学校の一年でオリエンテーリング部に入り、第一回の大会の地図からずっとスクラップしていますが、しばらく前の計算

でも、百枚は越えていました。ずいぶんいろんな場所を、走り廻ってきたものです。他にも、スポーツとしては縄跳びをやっていました。縄を交差させて跳ぶのはすぐできるようになり、さらに三回、四回と縄を回転させる跳び方を工夫するのが面白くなりました。基盤となる、ある体力を必要とするものではないので――つまり僕がすぐさまサッカーやラグビーに熱中する、ということは不可能だったはずですが――、毎日熱心にやるうち、体育の先生がヴィデオにとって下級生に見せる跳び方のモデルに選ばれたりもしました。

ある日、夜も遅くなってからの気晴しに、玄関の前に出て、その時分練習していた「前方交差四回転跳び」というのをやっていました。そのうちに、縄が躰じゅうにからまって、動きがとれなくなったのです。たまたまそこへ帰って来た父が、暗がりのなかに僕を見て、ギクリという表情をしました。そこでいったん風呂に入った後で、鏡の前で、縄にからみつかれた恰好を再現してみると、肋骨が曲っている・その結果胸が歪んだ箱のように見える、ということもあって、本人自体一応ギクリとしたものでした。

僕が『骨董屋』のキルプに気持をひかれたのと、それとは関係があったかもしれません。忠叔父さんは、ペンギン・クラシックス版のテキストを手に入れてくれた際、赤鉛筆で問題点を囲んでくれるより前に、――まず百ページ、ざっとでいいから読むように、といったのでした。僕の方では、ずいぶん乱暴な要求だぞ、日頃暴力犯を相手にしているからかなあ!? などと反撥したのですが、それでも一応、

忠叔父さんの指示通りに読みはじめました。辞書はひかないで、言葉ひとつひとつというよりは文章の一節ずつを、意味を想像するようにもして読め、しかしまるっきりわからぬ一節があったら、そこに立ちどまって幾度も読め、そうしなければ続き具合がよくわからなくなって、興味がつながらないから、と忠叔父さんはポツリポツリという仕方で、注意してくれていました。そのようにして読み進むうち、キルプという人物に興味を持つようになり、ディケンズが雑誌に連載した際の、カッターモールという人とブラウンという人の挿絵を、キルプにそくして終りまで見てゆく、ということもしたわけでした。

そうした挿絵の、それも最後の方に、テームズ川の河口近い沼沢地の大きい棒杭の根方に、溺死したキルプがうちあげられている絵があったのです。躰が捻じれている恰好も、歯と目をカッと剝いている表情も、縄跳びの縄にからめとられたところを鏡の前で自分が再現した、その様子に似ているような気がしました。――これは、これは!? と思って、そのあたりのページを走り読みし、ページの中についている註の数字を確かめてもみて、海賊の処刑として、満潮になると水没する場所に縛りつける方法があったことも知りました。キルプの脇の大きな棒杭は、そのなごりだったはず。この際、一応註を読む練習をしたことが、忠叔父さんの質問にまごつかないですんだ理由でした。

5

ネルという少女は、これでもか・これでもか、という具合に愛らしく描かれています。小説の書き出された時点で、ネルの祖父は、キルプから金を借りて賭博をしています。幾度目かにその金を借りる使いに出たネルが、夜のロンドンで道に迷って、語り手と街角で出会う。そういうかたちで小説は始まったのでした。とどのつまり永年かかって築き上げた骨董屋の店と住まいまでキルプに取りあげられてしまうのですが、もともと老人は、可愛い孫娘のために財産を作ってやるため、と考えて賭博を始めたのでした。損をかさねながらも、"Hope and patience, hope and patience!" と自分を励ましている、まったくトンデモナイ人物です。

忠叔父さんは、キルプが"an elderly man of remarkably hard features and forbidding aspect, and so low in stature as to be quite a dwarf, though his head and face were large enough for the body of a giant."《法外なほどきびしい顔かたちと、いまわしい風采の初老の男、そして身長はいかにも低くて、ほとんど侏儒(こびと)、しかも頭と顔は巨人の躰にふさわしいほどの大きさ。》、として登場してからの、次の描写にも、赤線で括弧をしていました。

"His black eyes were restless, sly, and cunning ; his mouth and chin, bristly with the stubble of

a coarse hard beard; and his complexion was one of that kind which never looks clean or wholesome. But what added most to the grotesque expression of his face, was a ghastly smile, which, appearing to be the mere result of habit and to have no connexion with any mirthful or complacent feeling, constantly revealed the few discoloured fangs that were yet scattered in his mouth, and gave him the aspect of a panting dog. His dress consisted of a large high-crowned hat, a worn dark suit, a pair of capacious shoes, and a dirty white neckerchief sufficiently limp and crumpled to disclose the greater portion of his wiry throat. Such hair as he had, was of a grizzled black, cut short and straight upon his temples, and hanging in a frowzy fringe about his ears. His hands, which were of a rough coarse grain, were very dirty ; his finger-nails were crooked, long, and yellow."

《かれの黒い眼はおちつきがなく、こすっからく、ずるそうでした。かれの口もとと顎は、不精に伸びた粗く剛い口ひげでとげとげしいのです。それにかれの顔色は、決して清潔にも健康にも見えない種類のものでした。しかしなによりかれの顔のグロテスクな印象を強調するようであったのは、もの凄い薄笑いでした。それは習い性の単なる結果として見えてくる、いかなる愉快さの、あるいは自己満足の感情とも関係がないもので、かならず、まだ口に散らばっている、色のあせた数本の歯をあらわすのでした。そしてハーハーいっている犬のように見せたのです。服装は、大きい山高帽と着古した黒い服、デ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com